

地域と文芸

第7部 児童文学の伝統

5 広島発の絵本

多くの子どもたちにとって、文芸への最初の扉を開いてくれる「絵本」。児童文学研究者の故鳥越信さんの編著「はじめて学ぶ日本の絵本史I」で「近代日本の絵本史の起点」に位置付けられるのが、1870(明治3)年から広島出身者によって刊行されたと言われる「絵入智慧の環」だ。著者は、現在の広島県北広島町出身の教育者古川正雄(1837~77年)。広島で漢学を学んだ古川は、大坂に出て蘭学者緒方洪庵の適塾に入門し、福沢諭吉と出会う。後に福沢が江戸で開いた慶應義塾の初代塾長を務めた。

■ 外来品も紹介

「絵入智慧の環」は全8冊。その中で、最初の2冊が絵本のルーツとされる。仮名や方位、季節が楽しく学べるよう絵を添えて解説。さらに「蒸

今へ受け継ぐ国際的視野



自社の新刊を手に、児童書担当の中村さん(左)と語る小島さん(右) (広島市中区の丸善広島店)

新進の出版社翻訳に熱意

「気船」や「せびろ」といった外来品を絵入りで紹介している。今でいう知識絵本に近く、72(明治5)年に始まる学校制度下で採用されたことから、日本最初の小学校教科書ともいわれる。

絵本というジャンルが確立していなかった時代に、国際的視野も持つて、子どもに親しみやすい工夫を凝らした郷土の先覚者。その伝統を、今に受け継ぐように感じられる。新進の出版社が広島にある。個性豊かな翻訳絵本を手掛ける、きじとら出版(広島市中区)。9月、11冊目となる「シヤリーニ 国境をこえて」を刊行した。イタリア出身のフランチェ

スカ・サンナさんの作で、原書は英国の出版社から刊行された。第24回いたばし国際絵本翻訳大賞(東京都板橋区主催)の最優秀翻訳大賞(英語部門)に輝いた、青山真知子さんによる訳で出版した。

戦争が起き、よその国へと逃げる母子。子どもの目を通して、難民がたどらなければならぬ。内外の名作絵本を読み聞かせる中で、「世界観が豊かで、何度読んでも飽きない」魅力に触れたという。学生時代から鍛えた英語力を生かせる、絵本の翻訳を志した。

会社設立後は毎年のように、同翻訳大賞の英語部門とイタリア語部門の受賞作を出版してきた。今年、イタリアの絵本「おやすみなさい トマトちゃん」も7月に刊行している。

小島さんの熱意は、地元の書店の共感も呼んでいる。「イタリアの翻訳絵本など、なかなか見掛けない絵本に触られる。関心を寄せるお客さんは多い」と、丸善広島店(中区)の児童書担当、中村亜弓さん(31)。同店は、きじとら出版の船出の時から、書棚に紙飾りでコーナーを設けて後押ししている。

小島さんは「絵本を通じ、外国の文化や子どもを身近に感じることができれば、平和にも結び付くと思う。広島から世界の本を発信する意義は大きい」と力を込める。

■ 飽きない魅力

広島県熊野町生まれの小島さんは、大学院修了後に就職した県庁を結婚を機に退職し、08年に長男を出産した。

先入観から自由な子どもの感性を引き出し、地域と世界をつなぐ。児童文学の伝統を更新していく、みずみずしい息吹がある。(石井雄一) 第7部おわり